

られたものであり、もちろん単系統群ではない。では、葉上苔類をひとまとめとして扱うことに、どのような科学的意義があるのかというと、葉上苔類が「葉の上」という特殊な環境に対して共通の適応的形態（葉面に圧着する植物体、扁平で単純な構造の茎、胞子内発芽する大きくて不定形の胞子など）を示すことに鍵がある。著者らは、葉の上は温度と湿度に関して不安定な環境であることが、共通する形態をみちびきだしているのではないかと推定している。もっとも、葉上苔類のほとんどの種はクサリゴケ科 (Lejeuneaceae) に属しており、乾燥適応形態のいくつかは系統的な制約を受けているのは間違いない。

中国のコケ植物フロラを扱った最近の出版物では、検討した標本が列挙されるようになり、利用者にとっての価値が著しく向上している。評者は苔類の専門家ではなく、内容（とくに分類学的取り扱い）について詳しい評価は下せないが、北京 (PE) に保管されているタイプ標本を検討していないこと（なんらかの事情があるのだろうが）、シノニムとして扱っている種を自分たちで検討したのか、あるいはこれまでの論文をそのまま引いているのかははっきりしないことなど、いくつか不備な点は見受けられるが、購入して手元に置く価値は充分にある本である。

(兵庫県立人と自然の博物館 秋山弘之)

□ Dierßen K.: **Distribution, Ecological Amplitude and Phytosociological Characterization of European Bryophytes** 289 pp. 2001. Bryophytorum Bibliotheca Bd. 56. J. Cramer, Berlin. DM 140.00

本書は筆者の30年以上にわたる研究ならびにその間に集積した欧州産蘚苔類の分布と生態についての植物社会学や生態学に関する情報を集積したものである。6章よりなり、第1章は導入、第2章は欧州産蘚苔類群落のシノプシス、第3章は蘚苔類がよく出現する植生型のシノプシス、第4章、第5章はそれぞれ蘚類、苔類各種についての情報の要約、第6章は570件におよぶ参考文献となっている。ページの大半 (pp. 37-260) は第4章と第5章が占めている。そこには蘚類約1300種、苔

類約400種が掲載されている。そこでは、種をアルファベット順に配置し、各種について分布域を植生帯、海洋度と垂直分布帯など48項目に関する情報を略号で標記している。項目の多さと略号の組み合わせのためにひと目で各種の分布状況を理解するのが難しい。必要に応じて分布情報の次にレッドデータの評価が欧州基準 (IUCN) で示されている。更に生育地の酸性度、栄養要求、汚染や乾燥、熱、光に対する適応度、基物要求、人為環境との関わり度、生存戦略度などに関する情報など盛りだくさんの情報が与えられている。ただ、残念ながら現在、各種についてすべての情報が整っているわけではない。しかしいづれにせよ植物地理学、植物生態学ならびに保全生物学に関わる研究者には有益な文献である。内容的にはデータ集であり、磁気化しておく方が使いやすいかもしれない。

(出口博則)

□ Rajbhandari K. R.: **A Bibliography of the Plant Science of Nepal. Supplement 1.** The Society of Himalayan Botany, Tokyo. 160 pp. Academia Book Co., Tokyo. ¥9,000 (送料別).

1994年刊行の同名の文献目録の続編である。1994年から1999年に発表された報文および前目録に漏れていた報文約600件が、共著者を含む全著者名を見出しとして、簡潔な解説つきで並んでいる。全160頁のうち目録は78頁、残り82頁は索引である。索引は前目録をも含む累積型で、Subject Index, Index of Place Names, Index of Scientific Namesの三種類あり、そのほとんどに短い内容紹介がついている。ネパール植物の研究にきわめて有用な作品である。編者がヒマラヤ植物研究の基礎資料を蓄積し、その利用の便をはかるために、今後もこの方針を維持しようとする努力を高く評価したい。その一助として、今後蓄積量が増すにつれて見込まれる、累積型索引についての問題点とその対策について意見を述べておく。初巻は目録162頁に対して索引83頁で、その比は1:0.5であるが、本巻では1:1の比になっていることからわかるように、累積型索引は各巻の目録量にかかわらず急速に増加するので、後になって整理が追いつか

なくならぬような工夫が必要なのである。

今回の索引では、前目録と本目録に収載された報文の区別を、年号に先立つ“*”の有無で区別しているが、次回以降はこのやり方はむづかしくなり、“*”の代わりに、さし当たりはかっこ付き数字などを用いる必要がある。さらに、蓄積量が増えればソフト的な検索手段を導入する必要が生ずるので、個々の文献を区別するために固有のコードを与える必要が出てくるだろう。学名索引については、特定の種や属の他に、たとえ種や属が違って、分類学的に近い種類でもよいからチェックしたいという要求が出てくるに違いない。したがって学名を科や上位群でくくって示す方が、利用価値が高いものと思う。同様に地名索引の場合にも、地名がどの地域のものであるかを示す方が、利用価値が高いだろう。ただし外国人としてはネパールの地政学に無知であるから、District や Panchayat 単位でまとめられるとかえってわかりにくい。むしろ地名にはすべて Zone 名を付加した上、現在のように abc 順に並べるのがよいと思う。日本でもそうだが、同じ地名や綴りが微妙に異なる地名があちこちにあるので、綴りが一致したからといって、それが目的のものであると判断するには、傍証が必要なのである。Subject Index は前記のやり方でかなり整理されるが、後になるほど複雑多岐になるに違いない。これについてもいくつかの大区分を設け、その中にトピックをまとめることを考える必要がある。

以上を要約すれば、編者が独自のキーワードを設定し、それに文献の内容をあてはめるという方針をとるのがよからうということである。現在の学術論文は、著者がキーワード

を提示することが要求されているが、これは前時代の遺物であって、何の制約もなく各著者が書いたキーワードは、検索という観点からはほとんど意味がない。今日のようにテキストデータを用いて全文検索ができる時代になれば、そんな不統一な「キーワード」を使うよりは、表題や要旨、ときには全文を対象として、ユーザーが必要とする単語を入力しさえすれば、目的を達せられるからである。文献データの作成と共に、くくりのためのキーワードを編者が工夫し、それぞれの文献に付与するのがよい。現在でもとくに Subject Index ではそういう工夫がなされているが、これをより階層的なものにする努力が必要である。この作業は楽ではない。文献情報自体のデータ化は、他人にやらせてもある程度慣れれば可能である。しかしキーワードの付与は、編者自身が統一された体系を持つ必要があり、かつ文献をそのどれとどれに割り付けるかを、とっさに判断せねばならないからである。こういう体系があらかじめ出来ていないと、キーワードの割り付けに偏りができる、それを修正して新たなキーワードを作れば、すべての文献に遡って新たにコードを割り付けなおす作業が必要になり、つきあいきれなくなる。したがって、粗雑でよいから全体をカバーできる階層キーワードを、はじめから作っておく必要がある。私の日本植物分類学文献総目録の索引篇は、そういう考え方と苦い経験の上に立つたものなので、多少の参考になるだろう。

本索引は CD-ROM としても出版の計画があるとのことなので、その際には上記のことを考慮して、仕様を工夫してもらいたい。

(金井弘夫)